花妖精、恋を知る？

来栖ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花妖精、恋を知る？

【Ｎコード】
Ｎ７４６８Ｘ

【作者名】
来栖ゆき

【あらすじ】
人間になりたい妖精と、それを手伝うはめになった悪人レオンの恋（？）物語。
振り回したり振り回されたりの、ほのぼのストーリーです（たぶん……）

□■□ルルルカップ第６回　「身代わりの恋」応募作品（落選）□■□

短編部門ですが初めて応募した作品となります。
次に繋げていきたいので、文章やストーリーなど批評して頂けると幸いです。

第一花

――ずっと探していた。ひと月も待った。この人を……。

突然、ガタンと揺れて目を覚ました。どうやらうたた寝をしてしまったようだ。

もうすぐ蒸気機関車とやらが出発するのだろう。汽笛というものを初めて聞いたがとても耳障りな音だった。

けれど中に入ってしまえば子守唄にも等しい。ほんの数年前はこんな乗り物はなかったのに、便利な世の中になったものだわ、と少女はしみじみ思った。

「お客さん、切符――」

「旅のお供に特製サンドウィッチは――」

「ドロボー！　誰かぁぁ鞄を盗まれたぁぁ――」

大勢の人間のさざめきが風のように遠くへ流れてゆく。

そんな雑音と、カタコトと小刻みに揺れるこの雰囲気がまた睡魔をそそり、またまどろみ始める。

――次にこの扉が開かれた時、あたくしは貴方に逢えるのね。

少女は喜びに満ちた表情で、もうすぐ先の未来へ想いを馳せた。

心地よい振動が続いた後、最後に大きな揺れに襲われた。

足場が揺らいだと思った瞬間、ゴツンと硬い物が頭を打つ。

暗闇の中では周りがどうなっているのか解らない。

「もう、乱暴ね！」

殴打した頭を撫でながら、彼女は独りぼやいた。

しかし、カチリと扉が開く音がして眼前に一筋の光が見えるとそんな怒りも急速にしぼみ、代わりに期待で胸が膨らんだ。

開いた隙間から漏れた細い光の線は、だんだんと大きくまばゆい光へと変貌する。
眩しくて思わず目を背けた。
けれど、こんなところで立ち止まってなどいられない。いよいよだ、いよいよ彼に逢える！
少女は全身に力を込め、喜び勇んで光の外へと飛び出した。
「あなたの名前を嘘偽りなく答えなさい！」
開口一番でそう言うと、しばしの沈黙の後、驚いた声音で「レオン」と名乗る男の声を聞いた。
その名は違和感なくするりと彼女の身の内へ流れる。それはその男の真実の名だったから。
そう、彼女に嘘の名は通用しない。
外の眩しさに目が眩み男の顔がよく解らないけれど、少女はすでに見知っていた。
彼が太陽を思わせる亜麻色の髪と、湖のように青く深い瞳の持ち主だと言う事を……。
少女はその人物に迷わず飛び込むと、有無を言わさず口づけを交わした。
「レオン……」
口づけの余韻にひたりながら、その名を舌で転がした。
これで契約成立ですわ。彼女は口元に笑みを浮かべて勝ち誇った。
これで、やっと夢が叶うのだ――。
「あたくしは――んきゃー！」
レオンと名乗った男は、彼女の首根っこを掴むと目線より少し上に持ち上げて眺めた。ぽかんと開けた唇からは微かに血が滲んでいる。
「なんだ、お前は？」
「こら！　離しなさい、無礼者！」
じたばたと暴れるが、襟首を掴まれると自分ではどうにもできないのが弱みだった。

仕方なくそのままの体勢で言い放つ。
「あたくしは永遠の聖なる光の花“エターナルグローリー”の花妖精。あたくしが貴方を選びました。さあ、あたくしと一緒に善き行いをなさい。さすればあなたはエターナルグローリーの花言葉の通り、妖精からの幸せな贈り物を得る事でしょう！」
燦々（さんさん）と光を浴びて輝くストロベリーブロンドの長い髪は腰の辺りまで伸び、毛先だけがくるくると縦にカールしている。
大きなブルーグリーンの双眸は深い森の緑と夏の青空を混ぜたような不思議な色。
葉と蔓と花びらで編んだ簡素なドレスを身にまとうその少女は――手のひらサイズの妖精だった。

妖精とは――人の形を取った小さい生き物で、自然界にのみ生息している。ごく稀に人間の領地に現れてはイタズラやささやかな贈り物をする。
彼らの話はどこの街でも、どんな田舎でも子供にお伽話として語られた。
そしてその姿を目視できるのは純粋な心を持つ子供や乙女だけであるが、大人へと成長するにつれて、いつしかその者の目にも映らなくなる。

長時間他人のトランクに忍び込んでいた妖精は、久しぶりに暖かい日の光を浴びて、いい様のない高揚感で胸がいっぱいになるのを感じた。
「さあレオン、手をお放し下さいまし！　あら……人間とは不思議な生き物ですこと。ついさっきまでは太陽の光でしたのに、今は夜の闇ですわ！」
太陽の――亜麻色の髪の男を追いかけてそのトランクに忍び込んだ彼女は、夜の闇を思わせる漆黒の髪の男を見て感嘆の声をあげた。
しかし人間はこんな短時間に風貌が変わっただろうか？

ようやっと外の明るさに慣れた目で、先ほど自分の主となったレオンをまじまじと見る。
それはいかにも悪人面な、目つきの悪い男だった。
年の頃は一八、九歳ほどだろうか。右側の眉上辺りに細い三日月型の傷がある。
適当に切り揃えたのであろう長さの不ぞろいな漆黒の髪に灰色の瞳。そして身を包む濃紺の外套は色褪せて、長年使い込んでいる様子がうかがい知れる。
不思議そうにレオンを眺める妖精を、彼も同じような表情で見ていた。
「あー、それはきっと……人違いだ」
レオンは多少口籠りつつも簡潔に告げた。
「悪いな、俺はこのトランクの持ち主じゃない。貴族の男から奪っただけだ」
意味が解らず小首をかしげてじっと灰色の瞳を見つめていたら、彼はそう付け加えた。
人違い？持ち主ではない？
奪った……？
そういえば、このトランクの持ち主は優雅で物腰の柔らかな、まさに太陽のような人だった。
目の前のこの男はいかにも悪事を働きそうな顔をしている。
じわりじわりとその真実を実感した妖精は絶叫した。
「ま、間違えましたわぁー！　どうしてですの？　いつ入れ替わったんですの？　あ、あ、あたくし、別の人間と契約をしてしまいましたわ！」
浮かれて本人確認をせず、どこの誰かも解らない男と契約をしてしまった。それは知らない相手と結婚証明書にサインをするようなもの。
妖精は自分の愚かさ加減に愕然とした。
「お前は、本当に妖精か？　ガキの頃に見たやつと随分違うじゃな

いか」
　この大変な状況をまったく理解していないのか、レオンはまるで不思議なものでも見るかのように、彼女を摘んだまま上から下からと眺める。
「止めて下さいまし！　レディをそんないやらしい目で舐めまわすように見るなんて――」
　失礼ですわ！　と文句を言っている最中に、気分を害したらしいレオンにポイと投げられた。
「きゃん！」
　そのまま地面に転がりしたたかに額を打つ。４つ星ランクの花妖精を、よくも投げ捨てましたわね！
　こんな風に侮辱されたのは彼女にとっては初めてだった。プライドが許さず憤慨してレオンの元へ、今度は掴まれないよう注意しつつ近づく。
「あなた、初対面ですのに色々と無礼ですわ！」
「うわ、唇切れてら。お前がぶつかってきたお陰で怪我をしたぞ。どう責任取ってくれるんだ？　慰謝料出せ。有り金全部出せ！」
　妖精を恐喝するなんてこの男は極悪人だ、と彼女は確信した。しかし、そんなことよりも神聖なる口づけを無下に扱う事に腹を立てる。
「妖精からの口づけは大事な契約の証しですのよ！」
　レオンはどこが口づけだよ石頭、と呟きながら、奪ったトランクの中を物色し始めた。
「何をしているのです！　これは貴方のではないでしょう？　今すぐ持ち主に返すべきですわ！」
　レオンの周囲を飛び回りながらこの悪行を止めさせようとするが、ことごとく無視された。
　目的のものを見つけたのか、レオンは何かを抜き取るとトランクを閉めて立ち上がる。
「持ち主へ返しに行くんですのね？」

「うるさい、妖精がこんな街にいても良いことなんて何もねぇぞ。さっさと田舎へ帰れ」
しっしっと手を振って妖精を追い払うと、トランクを持って隣の建物へ飛び移った。
「ちょっと、お待ちくださいまし！　契約してしまったものはしょうがないですわ。レオン、あたくしと一緒に善き行いをなさい！」
彼を追いかけながら、妖精は初めてここの街並みに注意を向けた。
彼女が今までいた所は、地面ではなく屋根の上だった。
ひしめき合うように立ち並ぶレンガ作りの建物は、規則正しく縦一列に並び、それと同じ列が中心を軸に放射状に並んでいる。中心広場には背の高い時計塔があり、美しい街並みを威風堂々たる風貌で見守っていた。
ここは大都市シャイル。近代的な蒸気機関車が東側の駅へと乗り入れ、国内の街を結ぶ要所となるならば、西側に面する運河は隣国から物資を運び込むための大切な交通手段として利用されていた。
田舎の、それも森の中で生まれ育った妖精は、こんな大きな街を見たのは初めてであった。
しばし圧倒されてその景色を楽しむ。風が街の匂いを運び、初めて感じるその香りに、妖精はこれが都会なのね、としみじみ思った。

――エターナルグローリー。別名、永遠の聖なる光の花。
星型の小振りな花と旺盛に伸びる蔓を持つ多年草で、季節や気候によって赤白黄、紫や橙色など、多様な花が咲く。
花言葉は『妖精の贈り物』
「貴方には本日これより太陽と月が交互に7回現れる期間内に、善き行いをしてもらいます！　心配せずともあたくしが手助けをいたしますわ。だから精進なさい」
そう告げると、大抵の人間は驚喜して十字を切り、妖精を羨望の眼差しで見つめるのだ。

そして最後に決め台詞を言い放つ。
「善行が認められた暁(あかつき)には、星があなたを幸せに導くでしょう！」
「知るか、俺を勝手に巻き込むな！」
レオンは驚きもしなければ喜びもせず、ただ迷惑そうにするだけだった。
「花妖精のあたくしと契約の口づけを交わしたでしょう。今さら知らないなどとは言わせませんわっ」
時計塔から離れるように屋根から屋根へと移動したレオンは、適当な足場を見つけると、器用に地面へと降り立った。
狭い裏路地を縫うように、早足で歩き続ける。行けども行けども同じようなレンガ塀の風景だが、レオンの足取りから察するに馴染みの道なのだろう。
「数いる花妖精の中でも、人間の望みを叶える事ができる、誇り高く気高い妖精はあたくしたちだけですのよ！」
妖精はせっせと彼の後を追った。
どうにか彼にやる気になってもらわないと困るのだ。
「願いを叶える花妖精……そういや子供の頃、ばあちゃんがそんな妖精の話してたなぁ」
「そうでしょう、そうでしょう！」
もうひと押し！　妖精は上機嫌で、レオンの周りを蜂のようにぶんぶんと飛び回った。
その行為が彼の不興を買ってる事にはまったく気付かない。
「あたくしは４つ星の花妖精ですの。頭の星をよくご覧なさい、赤い宝石が４つあるでしょう？」
宝石という言葉に彼は即座に反応すると、立ち止まって妖精の頭上を凝視した。
言われた通り彼女の頭の周囲には、等間隔に星形の小さな赤い花が４つ咲いていた。
「って、花じゃねーか！」
「４つ星はエリートなんですのよ！　星を１つずつ集めて、ここま

で来るのに何十年かかったと思っていらっしゃいますの？　あら、百何十年だったかしら……？」
　両手の指を一つずつ折りながら今まで生きてきた年数を数えていたら、いつの間にかレオンは姿を消していた。
「もう、勝手にフラフラしないでくださいまし！」
　すぐに追いかけるが、右を見ても左を見てもどちらに行ったのか皆目見当もつかなかった。
　彼にはどうしても7日のうちに善き行いをしてもらわなければならないのだ。
「あと1つで5つ星の妖精になれますのに。そしたら名前を与えてもらって、念願の人間になるのですわ」
　彼女はすっと探していた、最後の星を一緒に手に入れてくれる人間を……。
　やっとの思いで太陽のような人を見つけた。ひと月ほど見張ってその人物が良識のあるやさしい心の持ち主だと判断した。
　服装も上等な物だったから、きっと名付けのセンスも良いのだろうと思った。
　何より亜麻色の髪は彼女の好みなのだ。妖精はしばし太陽や月の色を好む。
　それなのに、それなのに……。
「人間の選別は自分の目と経験と運が必須なんですの。あたくしは優秀でしたのよ。それなのに……せっかく見つけた太陽の元からあたくしを奪ったのは他ならぬレオンですわ！」
　やっと見つけたレオンに八つ当たりをする。
　もちろん、よく確認をせず契約を交わした彼女にほとんどの責任がある。
　巻き込まれたのは間違いなくレオンの方だろう。
「へいへい悪かったな、黒いので我慢してくれ」
　面倒になったらしく、レオンは適当に聞き流しながら相槌を打った。

「闇の黒に曇り空の灰色！　あたくしの一番嫌いな色ですわ！　でも仕方がありません、我慢しましょう。この小悪党を改心させて善い行いをさせれば、必ず星を得られますわ。だってあたくしは４つ星のエリートですもの。これくらい造作もない事ですわ。うふふふふ……」

「お前な……全部聞こえてるぞ！　独り言は小声で言え、悪口なら聞こえない所で言え、悪だくみなら黙って考えろ！」

我慢の限界を迎えたレオンは、不遜な態度を崩さない妖精に向かって叫んだ。

第二花

光り輝く大都市でも必ず影の部分はある。
時計塔から南側は主に労働者階級――一般市民が生活しているが、その市民の居住区から西へ向かった運河沿いは、世に言う貧民街だった。
多かれ少なかれ犯罪が蔓延(はびこ)る地域であり、窃盗、詐欺などを生業(なりわい)とする者が住んでいる。自分の身を自分で守れない者はそこに住む事を許されない。

そこへ向かうレオンもまた、貧民街で生活をしている一人である。そして、そんな彼の住み家(か)は、ベッドと机があるだけの狭く質素な部屋だ。
「ずいぶん陳腐(ちんぷ)な家ですこと……」
失礼極まりない妖精は、その部屋の様子を見て感想を述べた。
レオンは持てる限りの理性を総動員して聞こえないふりをする。
妖精を真っ向から相手にしたら自分が疲れる事を、ここまで来る間に身を持って学んでいたのだ。
元来、妖精とは単純で物事を深く考えず、直感的で楽天的。
自分の興味のある事にしか係わらない傾向があった。そしてその興味の延長線上に人間がいると、しばしば巻き込まれることがある。また、怒りや悲しみといったマイナスの感情は長続きしない。
単純な性格で扱いやすいとも言うけれど、長くつきあうととても疲れる類の生き物なのだ。
レオンはトランクを乱暴に投げ置くと、外套を脱ぎ代わりに壁に掛けられたハンガーから同じく濃紺の上着をはずして羽織った。前髪を掻き上げて髪型を変えると、上着と同色の山高帽を深くかぶり額の傷を隠す。
妖精は、先ほどと比べると印象が良くなりましたわね、などと勝

手にファッションチェックを始めていた。
「でも、色は赤が良いですわ。帽子に羽もつけましょう」
そんな派手な服着れるか……。レオンは心の中で突っ込んだ。
長居はせず、着替え終わるとすぐさまトランクを手に外へ出る。
今度は賑わいを見せる大通りをまっすぐ進んだ。
通りの両側には、食品や生活必需品を売っている小さな商店が並んでいる。
「すごいですわ！　人がいっぱいですわ！」
その頃にはレオンの肩の上が妖精の座する定位置になっていた。
その方がよそ見をしてもはぐれないと気付いたらしい。
多少の知恵は回るのか、と彼は少し感心してしまった。

この町の要となる大通りは時計塔を中心に十字に刻まれている。
横の大通りが運河と駅を一直線に結び、縦の大通りが労働者階級と特権階級の住まう地区を結ぶ。
そしてこの通りは位置する方角から東西南北の名を借りて呼ばれていた。
「一体どこへ行きますの？」
妖精は返事をしないレオンにしつこく何度も問いかけてきた。
「うるさい、話しかけるな。俺が独り言喋る怪しい奴みたいになるだろ！」
そんな妖精を嫌々相手しながらも、レオンは西通りの質屋へ行くとトランクと中身を換金してくれと頼んだ。
店主はそれを物色すると、しばらくお待ちを、と店の裏へ行ってしまう。
「二人きりですわ、もうお話ししてもよくて？」
「お前と話す事などない」
短く返答するが、やはり妖精は聞いていない。
「ここにトランクの持ち主がいらっしゃいますの？　あたくし、遠くからでしかお顔を拝見しておりませんの。太陽のお方とは逢える

かしら……」
寂しげにそう呟くものだから、レオンは少し同情してしまう。
「運命で繋がってたら……いつか逢えるんじゃねえの？」
「まあ、貴方の口から運命などという言葉がでるなんて、ちゃんちゃらおかしいですわね」
帰りがけに運河へ立ち寄って瓶につめて流してやろう――彼は固く心に誓った。
しかし、随分と待たされている気がした。
様子がおかしい……。レオンは何の気なしに外の様子を伺った。
すると、店舗の周りには数人の警官が隠れるようにして集まっていた。おおかた店主が通報したのだろう。
「くそっ、はめられた！」
奪ったトランクに貴族の使用する紋章が印字されていた事を思い出す。きっと盗難の情報が入っていたのだ。これ以上警官が集まる前に逃げなくては――。
勢いよくドアを開けると、レオンは全速力で大通りを疾走した。
「なんですのっ？」
妖精は訳が分からないといった表情で、それでも飛ばされまいと上着に必死な形相で掴まっていた。
気づいた数人が追ってくる。
振り切り、縫うように通行人を避けて脇道へと入った。
レオンはこうして追われる事には少なからず慣れていた。裏道も行き止まりも熟知している彼にとっては日常の事。
もう少し南へ行けば道が入り組んでいて逃げやすくなるのだ。
顔が見えないよう帽子を目深にかぶり直すと、狭い路地をひたすら駆けた。
しかし、すでに路地の先には先回りした数名の警官が道を塞いでいた。それに気づき、来た道を戻ろうとするが、背後からも追っ手が迫ってきている。
「ちっ、囲まれたか……」

妖精は、囲まれたらどうなるんですの？　などと悠長に問う。
「囲まれたら捕まって、殺されるんだよ！」
一か八か、突撃して血路を開く――そう決心した矢先。
「ならばあたくしに任せてくださいまし！」
妖精は、そこの路地へ、と指をさす。
「馬鹿か、こっちは袋小路だ！」
「妖精の小路（こみち）を開きますから、安心なさって」
さあ、と肩口を引かれる。追い詰められたレオンは他に頼るものもなく、自信満々の妖精が指し示す路地へと走った。
薄暗い路地の少し先には、行き止まりの変わりに蔓（つる）に覆われた、大人が立って通過できる程の緑のトンネルがあった。
「これに入るのか？」
背後から怒号が迫っている。レオンは一瞬躊躇ったものの、なるようになれ、とその蔓の中へ突っ込んだ。
蔓の入り乱れる緑のトンネルを進むと、唐突に目の前に見慣れた風景が飛び込んできた。
そう、トンネルを抜けると――自分の部屋の中だった。
レオンは勢い余ってベッドへ突っ込む。起き上がって背後を見ると、そこにはもう蔓のトンネルも、追いかけてくる警官の姿もなかった。
肩には妖精が自慢げな顔でにんまりと笑っている。
「これがあたくしの妖精の魔法ですのよ」
「……お前、すげーな。そんなことできるなら、早く言えよ」
ベッドに倒れた状態でぜいぜいと肩で息をしながら、レオンは息継ぎのタイミングで言った。
妖精は初めて役に立った事、誉められた事が嬉しかったのか、頬を上気させてレオンの周りを飛び回っていた。

――妖精の頭突き、もとい、妖精の口づけにより契約を交わした

者は、7日以内にその妖精と善き行いをする。
善行と認められれば人間は幸せを手に入れ、妖精は星を手に入れる。
星を5つ手に入れた妖精は、人間に名前を与えてもらい人間になれる。ただし、失敗すると星を1つ失う。
星を4つ集めたこの妖精はあと1つ、つまりレオンと善き行いをすれば5つ星妖精となり、失敗すれば3つ星妖精に格下げという未来が待つ、という事だった。
「大切な最後の星を手に入れた人間に名前を付けてもらうんですの。名前は一生ものですから、センスの良い人がよかったのですけれど。まあレオンでも我慢しますわ」
妖精は説明の終りにそう付け加えた。
「なるほど、じゃあ7日間はその変な魔法が使えるんだな。蔓の道はどこでも繋がるのか？」
「あたくしが行ったことのある場所ならできますわ！」
「なるほどねぇ……」
妖精は鼻高々に上機嫌で、レオンの笑顔の裏に隠された妖しい目の輝きにはまだ気づいていない。

「ほら、これを使え」
「何ですの、このボロ雑巾のような布の山は？」
ボロ……。
レオンは自らに冷静になれと魔法の言葉をかけて平常心を取り戻すと説明した。
「お前の寝床だ。春先でも夜はまだ冷えるからな。こっちきたら寝返りで踏み潰すぞ？」
そう言いながらレオンはベッドに腰掛ける。
「まあ、寝床などと……」
妖精は冷笑を浮かべ、フンと鼻で笑った。
「ご心配なく、エターナルグローリーは多年草ですわ。冬でも夏で

も水と日光と月光の届くところであれば咲き誇りますの。寒さなど関係ございません。どこでも寝れますわ。このような施しは結構です。でも、貴方の好意はありがたく頂いておきます」
「……ほんっとうにお前、腹立つヤツだな」
レオンは腹いせに、きれいにたたまれていたボロ雑巾――もとい、彼の数少ないシャツをくしゃくしゃにしてやった。
あたくしのベッドなのに！　などと一人騒ぐ妖精を無視して蝋燭を吹き消す。
闇夜に紛れて、独り言なのか問いかけているのか解らない声がレオンの耳に届いた。
「妖精をここまで手厚く扱ってくれるなんて。ましてや寝床を作るなど、最近は純真な子供しかしませんわ……ふんふん、この布はレオンの香りがしますのね」
「うるせっ寝ろ！」
我慢できず、レオンは闇夜に叫んだ。

翌朝からから妖精はレオンに連れられて街の色々な所を案内された。
そこから妖精の小路で行き来しては、レオンは思案顔で何かを考えている風であった。
「これが善行と関係ありますの？」
「ああ、急に何が起きるか解らないからな、逃げ道だけはきちんと確保しておかないとな」
「まあ……やる気になってくれて、あたくしも嬉しいですわ！」
レオンが一体何を計画しているのかは解らなかったが、目をキラキラさせてその目的の為に事前準備をしているので、妖精はただ単純に嬉しくなった。
しかし彼の言う準備が終わると、レオンは妖精の魔法を使って悪行ばかりを繰り返した。それが善行だと言われれば喜んで手を貸す

妖精だったが、終わって初めて気づくのである。犯罪の肩棒を担いでしまったのだという事に……。

――こうしてあっと言う間に6日が過ぎた。

「なにを悠長にしているのです！　あと1日しかありませんわ！」

商店で果物を適当に見繕うレオンの肩から耳に向かって大声をだす。

「あと1日もあるだろ、性急な行動はいつか身を滅ぼすんだぞ」

彼は迷惑そうに商店から十分に離れるとそう言った。

契約期限まであと1日しかないというのに、こうしてレオンはのらりくらりと妖精の説教をはぐらかすのだった。

「さて、俺は出かけるが、お前はここで好きなだけ食ってろ」

部屋に戻ると、レオンは今さっき買ったばかりの果物を並べ、妖精に告げた。

「まあ、全部食べてもいいんですの？」

宝石のような果物を、どれから食べようかと吟味する。

気付けば彼女は期限の事も忘れて、果物の甘さに心を奪われてしまうのだった。

第三花

「よし、前祝いだ！」
明日は7日目、妖精との契約の最終日。
例の計画を実行したら、大金を担いでこの街を出るのだ。
甘い果物で釣って口うるさい妖精を部屋に残すと、レオンは足取りも軽く馴染みの飲み屋へと向かった。
明日の夜にはここを発つ。最後に顔を出したかった。
「ロビン！　久しぶりじゃないか」
声のする方へ顔を向ける。店には仕事で付き合うだけの顔なじみが数人いた。
レオンも含め、彼らはここで仲間と悪事の相談をするのが常であった。こんな所に妖精を連れてくれれば、きっと彼女は耳元で喚き散らすのだろう。
レオンは自分の事をロビンと呼んだ者の元へ向かった。
「やあ、ジャック」
機嫌良く髭面の男に話しかけるとレオンは酒を注文し、ジャックやその仲間と他愛もない会話を楽しむ。
騒がしく懐かしいこの店の雰囲気は、この大都市の中でも好きな場所の一つだ。
「今日は随分機嫌が良いじゃないか、儲け話があるなら俺たちも混ぜろよ」
「実はでかい計画を立てているんだ」
数時間もすると酔いが回ってきたレオンは、ついつい上機嫌になる。
「まあ見てろよ……。今日は俺が奢る、好きなだけ飲んでくれっ！」
普段なら盛り上がる瞬間だというのに、ジャックはおろか、店内が静まりかえっていた。
一体何事かと男達の視線の先を追って、背後を振り返る。

「うわっ！」
レオンの背後には一人の女性が立っていた。若草色を基調とした生地に赤い花の模様が咲き乱れるドレス。ご丁寧にクリノリンまでつけてスカートをふわりと広げている。それは街の北に住む貴族の、貴婦人の服装であった。
イスとテーブルが乱雑に並ぶこの飲み屋では人が通るのにも苦労するほど混み合っていたが、そんな所に突如として現れた女性は場違いであり……広がるドレスはとても邪魔だった。
赤とも金とも言えないストロベリーブロンドに、見つめられれば吸い込まれそうなほど不思議な空と森の色をした瞳。店内の男達が全員目を奪われるのに十分な容貌だった。
彼女は、きゅっと唇を固く結び、腰に手を当てながらレオンを睨んでいた。
「目的も忘れて酒盛りとは、いいご身分ですこと！」
「お前、何故この場所が！　じゃなくて……え、え？」
レオンは目の前に立つ、人間サイズの妖精を上から下へと眺めた。
「あたくしを置いてこんなところで、何をしているんですの！」
「こ、これは……違うんだ別に何もしてない！」
意味が解らず焦るレオンは、何故か浮気現場を見つかった男のようにしどろもどろに言い訳をする。
「それとも、あたくしを弄ぶだけ弄んで、飽きたら簡単に捨てるんですの？」
感情が感極まった妖精は目に涙をためて言い放つ。きっと置いて行かれた事に対して言っているのだろう。
店内では彼らの成り行きを、固唾をのんで見守っている。
恥ずかしすぎること、この上ない。
「ちょ……誤解を招く言い方をするな！」
「おい、ロビン、お前の知り合いか？」
ジャックはにやにや顔で言う。
これ以上話を大きくして欲しくない。レオンは妖精の手を取って

店を出ようとした。
「ロビンとは誰ですの？　彼はレオンですわ！」
「そりゃ偽名だよ、お嬢ちゃん、この悪い男に騙されたね」
くっくっと笑うジャックに、妖精はケンカ腰で食ってかかる。
「ふん、騙されているのは貴方たちですわ、愚かしいにもほどがありますのね。あたくしは誰にも騙されませんの。そこまで単純じゃありませんから！　それに、彼の本名はレオンですわ。あたくし聞きましたのよ！」
妖精との契約は、真実の名前を名乗らなければならない。
「こら、行くぞ！」
ホントに勘弁してくれ……。レオンは妖精の手を引いて店を出た。

レオンに腕を引かれながら夜道を2人で歩く。大股で歩くレオンに遅れを取るまいと、妖精は慣れないハイヒールと足を大きく広げる事のできないドレスで小走りに走った。しかし腕を引かれる速さに追いつけず、とうとう足がもつれた。
「きゃっ」
振り返ったレオンに抱きかかえられて転ぶ事はなかったが、妖精はレオンの様子がいつもと違うことに気付いた。
その態勢のまま黙ったレオンの顔を見上げる。
ハイヒールのお陰で、爪先立ちをすれば口づけができるほど近い。
「何なんだお前は……妖精だよな？　なんでそんな姿してんだよ」
「当然ですわ、この町の流行はがっちりつかんでいますの！」
先日貴族街へ行った折、妖精はすれ違う貴婦人の服装を観察していたのだ。
スカートを摘んでくるくると回って見せた。ハイヒールというものがここまで歩きにくいとは思わなかったけれど。
でもこれを履くと、背の高いレオンに顔が近づく事が少し嬉しかった。

「違う、だから……お前、人間になったのか？」
「あら、違いますわ。月の魔法で人間の姿になれますの。もうすぐ満月ですから、驚きまして？」
ただし月の魔力を借りて人の姿を保てるのは、ほんの短時間だけ。
レオンはそれを聞いてまた黙ってしまった。
月明かりのお陰でランプは必要のない夜だった。
「都会とは変な所ですわ。こんなに人が沢山いるのに、先ほどあの店に入っても、誰もあたくしに気付きませんでしたの。ここの人たちは妖精を見る事ができない人ばかり。あたくしが見えるのがレオンだけだなんて、奇跡ですわね」
「そうか……」
「ところで、あなたはいつになったら善き行いをしますの？」
「うん？　、ああ。明日な……」
「明日は7日目ですわ！　失敗は許されませんのよ？」
先程からずっと考え事をしているレオンの前に回り込み、顔を近づけて彼の目をじっと見つめる。
しかしレオンは妖精の肩を押して、彼自身から距離を取らせた。
「……しっかりしろ俺、これは妖精の人を惑わせる魔力だぞ！」
ブツブツと一人呟くのを彼女は聞き逃さない。
「あら、ご存知ですの？　月の魔力は魅惑の魔法なんですの。あたくしが人間の姿になれるのは夜だけですわ」
「それ以外にも変な魔法使ってるんじゃないだろうな？　自分に惚れさすようなやつ！」
「どういう意味ですの！　もう、どうして目を合わせないのです？　何か後ろめたい事でもあるのでしょう？」
ブルーグリーンの瞳に見つめられれば、心を見透かされた気がして、レオンは落ち着かなくなるのだった。
しばらく歩き続け、不意に振り返ったレオンは妖精を情熱的な瞳で見つめる。
「お前、人間になると美人だな……。ちょっとお前の好みでいいか

ら身なりの良い男に声かけて茶でも誘え。しばらくしたら俺が乗り込んで、人の女に手ェ出すな！　って言うからさ。そいつ身ぐるみはいじまおうぜ」
来た道を戻るように賑やかな酒場へと手を引かれる。
その手を振りほどくと妖精は叫んだ。
「な、なんてことをおっしゃいますの！　そんな事をしたら星がもらえませんわ！」
レオンは、俺とお前ならいいコンビになれると思うぞ、と楽しそうに笑った。
月明かりに照らされた彼を見て、妖精はとても魅惑的だわ、と心の中で感じた。
けれど、それはしばらくすると泡となって彼女の心から消えていった。妖精という生き物の性質上、感情の長続きはしないものだから。

妖精はずっと不満顔でレオンのすることを見守っていた。最後の日だと言うのに、彼は自分の部屋の荷物をせっせと片付けるだけであった。
夜になったら出かけると言うが、夜になって7回目の月が空高く昇ってしまったらもう手遅れなのだ。
「しょうがないだろ、夜じゃないと出来ない事なんだから」
レオンはそう言うが、どこで何をするのか、彼女にはまったく知らされていなかった。
やっと出発したのは日が沈んでしばらく経ってから。
通りに人はおらず、傾いた満月が空の高い所へゆっくりと焦らすように昇ろうとしている。
「昇るまで、あと3時間ってところか」
時計塔広場まで来ると、レオンは時計を見上げながら言った。

「ねえレオン、あの塔の一番上に昇ったら、月に手が届きますかしら？」
「ったく、しょうがないな。まだ時間はあるし、行ってみるか」
「どちらへ？」
「月を掴みに」
そう言ってレオンはにやりと笑った。
この顔は何かを企んでいる顔だ、と7日間一緒にいた妖精でも気付いた。いつもは言い含められて騙されたけど、今回はそうはいかない。
「今のは嘘ですわ！　レオンはあたくしに嘘をつきましたわ！」
どこから手に入れたのか、レオンは時計塔の鍵を開けるとほの暗いらせん階段を上がってゆく。時計を動かすための機械部屋を抜けて、梯子を上った小部屋には空に向かって開く天窓があった。
月明かりが窓から射し込み部屋の中を明るく照らしている。
「いいか、驚けよ！」
レオンが窓を開いたその先に待っていたものは想像を絶するような光景だった。

第四花

空一面にささやかに輝く星は、掴めそうなほど大きく力強くまたたいている。そして夜空の主役である満月は、闇の中を明るくやさしい光で照らしていた。

その月の姿に圧倒されて、妖精はほぅ、と小さく吐息を漏らした。

「人間はすごいですわ。こんな高い建物を、月に手が届きそうな高い塔を作れますのね！」

街の中で一番高い時計塔から見た広大な夜空は、森の木の上から眺めた夜空よりも何十倍も大きく明るく見えた。

「そんなに良いもんかねぇ。人間って……」

「人間は嘘を吐く。やさしい嘘も、ひどい嘘も……。妖精にとっては全部同じ嘘ですの。でも人間にとっては違うものなのでしょう？あたくし、そこが知りたいの。どう違うものなのか。たくさん感情があって、たくさん考えて。人間のすばらしいところだと思いますわ」

だから人間になりたいと思った。

この夜空を見て、彼女はただ単純に綺麗だと思う心しか持っていない。

けれど人間は、――レオンは何か別の事も一緒に考える事が出来るのだろう。

だってレオンはこの綺麗な空を見ながら、どこか少し哀しげな瞳をしているのだから。そして考えた記憶は永遠に心に刻まれる。

「あら、あらあら！」

どうして今まで気付かなかったのだろうか。こんなにも素敵な事に。

「なんだ……どうした？」

レオンの顔をじっと見つめた。そして夜空に視線を移す。

やはり同じだ。

「レオン、あなたは星空だったのですね！　月が昇りきらない星空ですわ！」
意味が解らないという顔で彼は妖精を見つめる。
「漆黒の髪は夜の空、灰色――いいえ、銀色の瞳は星と同じですわ！　あたくし、どうして気付かなかったのでしょう？」
「お前、恥ずかしい事言う奴だな。いつも月しか見てなかったからじゃねえの？」
そう言って顔を隠すレオンはどことなく照れた風であった。
「もう少し見せてくださいまし！」
「見んな！　お前は空を見るためにここに来たんだろ、俺の事はほっとけ！」
「レオンも夜空の一部ですわ！　あたくし、確かに月しか見ていませんでした。月の隣で小さな星も輝いているのですね。綺麗ですわ！」

――妖精には簡単な感情しかない。
その感情は長続きしない一瞬のもの。
ここで見た月が綺麗だという想いも、その陰で小さな星が輝いていると気付いた感動も、明日になれば忘れてしまうのだろうか。
外套の端を小さな手で掴み、肩から乗り出すように空を見上げる彼女の記憶に、自分は残らないのだろうか、星を手に入れられなかった男として、記憶の片隅にでもあってくれれば……。
この夜空を見ていたら、何故だかそんなことを考えてしまった。
「あたくしは人間になったら木に囲まれた森の家で花をたくさん育てて暮らしたいのですわ」
妖精は何の脈絡もなく話題を変えた。一体何を考えてその話に飛ぶのか、最初はイライラしたけれど、今はそれが妖精なんだな、と思えるようになった。
彼女に振り回された7日間は、短いようで長かった。

「森の中に家なんか建てたら熊か狼に食われるぞ」
「大丈夫です！　ウサギとリスしか来ませんわ！」
なぜそう言い切れるのか理解できず、その天真爛漫な性格が羨ましくて笑いが込み上げてくる。ひとしきり笑い続けたら、妖精は頬を膨らませてむくれてしまった。
「ほら、これやるよ」
レオンは服の内側から革紐で縛った小さな指輪を取り出した。
紐を外して指輪の部分だけを妖精の頭に乗せる。
それは星のような銀色の宝石が付いたシルバーリングだった。
彼女の頭には４つの赤い花と銀色の星が１つ。
「まあ、妖精の女王様みたいなティアラみたいですわ！　あたくしに下さるの？」
「５つ目の星の代わりだ。……いや、もし手に入らなかったら悪いと思って」
「５つ目の星は、これから手に入れますわ。レオン、あなたならできます。自信を持って！」
だからこれは貰えませんわ、と妖精は頭から指輪を外してレオンに手渡した。
「男から貰った指輪をつき返すなんて、お前も悪女だなぁ」
「誰が悪女ですって！　あたくしは、善い妖精ですわ！」
小さな声で囁いたのに、それを聞きつけた妖精は怒り狂った。

レオンと共に向かった先は大きなお屋敷の裏だった。
ここは先日、昼間にレオンに案内されてきた所だ。
夜の豪邸は不必要な明かりを落としてしんと静まり返っている。
住民も寝静まったこんな夜更けに、一体どのような用があるのだろうかと妖精は訝った。
「レオン？」

そっと裏門を開けたレオンは裏口から中へ忍び込む。音を立てずに階段を上がり、目的の部屋へそっと侵入した。
――嫌な予感がしますわ。
彼は大きな金庫の前で足を止めると、外套の内ポケットから鍵を取り出す。
それは妖精にも見覚えのあるものだった。初めてレオンと出会った時、彼はトランクの中からその鍵を抜いていた。
「何をするつもりですの？」
鍵をそっと指して廻す。
カチャリと音がして金庫が静かに扉を開けた。窓から射し込む月明かりに照らされて、金庫の中の宝石や金貨が闇の中にうっすら現れる。
「レオン、これは泥棒ですわ！　悪事を働いてはいけません！」
レオンの濃紺の外套を引くが、小さい妖精では彼の所業を止めることは出来ない。
いくら声を荒げても彼以外に声は届かない。
レオンは持ってきた袋にそれを詰めると肩に担いだ。
「よし、妖精、蔓の道を開け。家に帰るぞ」
レオンは小声でささやく。
「いけません、こんなことといけませんわ！」
「大丈夫だ、これは善行だ」
「嘘です！　その袋を全て元に戻してくださいまし！　これは悪行ですわ！」
なんとか説得しようとレオンに語りかけるが彼はまったく聞いてくれない。
「ったく、重要な所で使えない奴だな」
レオンはそう言うと自力で屋敷を出ようと決めたようだった。
侵入する時よりも脱出する方が何十倍もの危険を伴う。金属のこすれる音を最小限に抑えようとすれば足取りも遅くなった。
「戻ってくださいまし！　レオン！」

彼をどうにか止めようと妖精は必至で袋を引っ張っる。
縫い目のほつれた部分から金貨が一枚転がった。そのほつれ目から次々と中身が転がり、かすかな音を立てはじめる。
「馬鹿、なんてことしてくれたんだ！」
「これはこの家の持ち主の物ですわ！　勝手に持ち出すなど許されません！」
レオンが何か言おうとして口を開いたその時――。
「何者だ？　侵入者だ！」
物音と話し声を聞きつけた使用人が喚きはじめると、途端に屋敷内は騒然となった。
レオンは踵を返して金庫のあった部屋へ戻ると内側から鍵をかける。
「妖精、蔓の道を開け！」
「その袋を置いていきますの？」
「ああ、置いていく。だから、早くしろ！」
扉は外からドンドンと叩かれ、今にも破られそうだった。
「ここで捕まれば俺は絞首刑だ！　頼む――」
月明かりに見えた妖精の顔は、強張って青白い顔をしていた。

レオンは妖精の小路を通って部屋に戻った。
置いていくと約束した袋はレオンの手の中にしっかりと握られている。
「やった、これで俺は金持ちだ！」
後は見つかる前にこの街を離れるだけだ。
纏めた荷物の中に盗んできた袋を押し込むと、さっきから大人しい妖精が気になって姿を探した。
きっと袋を持ってきた事に腹を立てているのだろう。
今までずっと騙し続けて魔法を使わせた。最初から善行などする

気はなかった。だから星が手に入らない代わりに指輪を渡して別れるつもりだった。
「どうして袋を置いてこなかったのです？」
か細い声が聞こえて暗い部屋を探す。
「これは……お前、どうしたんだ？　顔色が、真っ青じゃないか！」
ベッドの上に倒れている妖精を掴みあげるとぐったりしていた。
「あなたが悪い行いをすれば、あたくしの、生命力が削られますの……」
「は？」
そんな話は、一度も聞いていない。
「善行できなかったら星が減るだけなんだろ？　星の代わりに指輪をやるぞ」
「善行できなかったら、星が減ります。ですが、悪行を繰り返せば、妖精は朽ち果てますわ」
朽ち果てるって、死ぬのか？
「何でそんな大切な事をだまってたんだ！」
「大切……ですの？」
「大切だろう！　最初に言っていれば――」
言っていれば……俺は何をした？　善行を尽くしたか？
「くそっ」
レオンは窓から空を見上げた。
満月はもうすぐ真上に、７日目のタイムリミットに近づく。

第五花

レオンは盗んだ袋を持って外へ飛び出した。
妖精の魔法が使えなければ自ら行くしかない。
月夜に照らされた道を、ほんの数時間前に妖精と歩いたその道を、ただひたすら駆けた。
時計塔まで行くと、騒ぎを聞きつけたのだろう警官がランプを持ってうろついていた。
レオンは盗んだ袋をその一人に投げつける。
「俺が盗んだ、だが返す！」
レオンはそのまま踵を返す。これで何も盗んでいないことになるだろうか。
笛を吹きながら追いかけてくる警官を裏路地に入ってやり過ごす。
彼らは執拗にレオンを見つけては追いかけてきた。警察の威信に賭けてでも泥棒を捕まえたいのだろう。
完全に撒くまでは帰れない。焦りばかりが彼の心を支配する。
月はそんなレオンをあざ笑うかのようにゆっくりと、確実に昇っていった。

――それからしばらくして、満月は夜空の真上に鎮座(ちんざ)した。
ふっと身体が軽くなって、妖精はむくりと起き上がる。
何か、様子が違う。はっとして窓に姿を移して頭を見つめた。
「まあ！　５つ星ですわ！　あたくし５つ星妖精になったのですわ。レオン！」
満面の笑みで振り返るが、静まり返った部屋の中にレオンの姿はなかった。
「もう、またあたくしを置いて一人で出かけたんですのね！　どこ

へ行こうとも、風があなたの匂いを教えてくれるんですのよ」
妖精は夜空の街を飛んだ。どこをどう飛んだのかは解らない。けれど、レオンの匂いを辿って石造りの建物を見つけた。
「レオン！」
カビ臭くて暗い、石に囲まれた部屋に辿り着くと、遠くの明かりに照らされたレオンを見つけた。
獣脂（じゅうし）を燃やす蝋燭（ろうそく）の臭いが嫌でも鼻につく。妖精は無意識に鼻に皺を寄せた。
「お前、なんでここにきた？　いや、元気そうだな……」
「匂いを追ってきたのですわ！　見てくださいまし、星が５つになったんですの」
それを見たレオンは、よかったな、と微笑みかけてくれた。
「これで念願の人間になれますわ！　さあレオン、あたくしに名前をくださいまし！」
今ここでか？　と驚くレオンの外套の裾を夢中で引っ張る。
「『ルーチェ』俺の生まれた国では、光という意味だ。気に入ってくれるか？」
「ルーチェ……あたくしの名前。ありがとうレオン！」
彼は弱々しく微笑むだけだった。
何故いつもの意地悪そうな笑顔ではないのかと気になったけれど、５つの星が光を増して妖精の全身を包んだ瞬間、その疑問は同時に光にかき消された。
光は少しずつ凝縮し、そこに現れたのは人の大きさをした妖精、ルーチェだった。
「レオン、あたくし人間になりましたわ！」
「ば、馬鹿かお前は！　なんでこんな所で人間になってんだよ！」
しばらく呆気にとられたレオンは急に驚いた顔をして叫んだ。
「レオンに早く見せたかったんですの。明日の朝、太陽の下を一緒に歩いて下さいまし！」
そう言ってもレオンはあまり喜んではくれないみたいだった。

人間になったばかりの彼女からしてみたら、まだ複雑で解らない事が多い。
「レオンの幸せの塊ですわ。これは貴方の心の奥にある願いを叶えますの」
そうだ、とルーチェは掌にある赤い花をレオンに手渡す。
レオンは両手でルーチェの両手を、赤い花を握った。
顔が近づいて初めて気づく。
「レオン、怪我をしてますの？　どうし――」
その続きはレオンの唇に塞がれて言えなかった。
しばらくして、カツンカツンと石の階段を降りる数人の足音が近づくと、レオンはそっとルーチェから離れた。
「地下牢で光が見えたなんて、本当だろうな？」
人が近づいてくる気配を察すると、レオンはそちらに意識を向ける。
「レオン、口づけをしても、もうあたくしは人間ですのよ。魔法も契約も関係ありませんわ？」
「俺の望みは、お前がここから無事外へ出る事だよ」
どういう意味かと尋ねる前に、赤い花は手から消え、気付くとルーチェは暗いレオンの部屋に一人佇んでいた。
違和感を感じて見ると薬指にはいつの間にか指輪がはまっている。
そして、彼女の周りには、願いが叶った後に散る赤い花びらが、ひらひらと待って音もなく落ちた。

それから夜が明けても、太陽が昇ってもレオンは戻ってこなかった。
これ以上は待っていられない。探しに行こうと思い立ち、レオンと二人で歩いた大通りをルーチェは今、一人で歩く。
妖精ではないルーチェに、風はレオンの匂いを運んではくれない。
昨日は一体どこで会ったのだろうか……。
「お嬢ちゃん！」

急に声を掛けられて振り返ると、そこには見覚えのある髭面の男が立っていた。
「あんた、この前ロビンと一緒にいたよな？　大変だ、ロビンが――」
ルーチェは時計塔広場へと走った。
足が痛もうとスカートの裾が翻ろうと関係なかった。
髭面の男は言っていた、太陽が真上に昇ったら、時計塔広場でレオンの公開処刑が始まるのだと――。

民衆の娯楽的要素の多い公開処刑。大衆の面前での絞首刑は、昨今の世でも見せしめの為にと行われている悪政だった。
どこかの愚かな悪党が捕まって処刑される……。
自分に関係のない人間は楽しむだけの為に人を一人見殺しにできるのだ。彼女にはまだ理解できない人間の感情だった。
ルーチェは人波をかき分けて処刑台へと近づく。
「レオン！」
絞首台の上には首に縄をかけられたレオンが佇んでいた。
こちらに気付いたレオンはいつもの意地悪そうな笑顔だった。
まだ、生きている。
「実は昨日、出頭したんだ。上手くいくか解らなかったが、月が昇る前に善行だと認められて本当に良かったよ」
彼は今までの罪を認め、罰を受ける覚悟をした。
それが善行だと星が認めた――？
５つ目の星は、彼のこの善行によって得られた。
彼の命と引き換えに、ルーチェは人間になったのだ。
「嘘よ、嘘だと言ってくださいまし！　貴方は嘘が上手いのでしょう？」
「君は共犯者か？」
近づこうとしたら見張りの警官に止められた。
「その格好みれば解るだろ？　俺が勝手に騙して連れてきたどっか

のご令嬢だよ」
レオンが口を挟むと、困ったように顔を見合わせた警官二人に両側から引っ張られる。
「いやっ離してくださいまし！」
「お嬢さん、危ないから離れて」
いくら叫んでもいくら暴れても、屈強な男2人に抱えられてしまえばルーチェは何もできない。
「何か言い残すことは？」
「俺は悪党だが、殺しは動物でも人間でも妖精でもしない主義なんだ。これが俺の最初で最後の善行だ――」
レオンはにやりと笑って言う。
それを聞いた街の人間は、不思議そうに顔を見合わせた。
太陽が真上に昇ると、時計塔が街の至る所へと正午の鐘の音を響かせた。

――刑の執行が、始まる。
「いけません、彼を殺しては！　あたくしが最初に間違えなければ、こんなことにはならなかったのです！　あたくしの責任なのです！　消えるのは妖精の方ですわ、そうでしょう？　人間が妖精の身代わりとなって死ぬなど許されません。そうでしょう、女王様！　どうか、どうかご慈悲を！　お願いです、あたくしは消えてもいいからレオンは助けてください！」
ルーチェは空へ叫び心から祈る。
そして、初めて人を想って流れた涙が頬を伝うと、地面を濡らした。
その瞬間、時計塔広場は光に包まれる。誰もがあまりの眩しさに目を瞑った。
レオンとルーチェは光の中にいた。
「花妖精、あなたの心に免じて彼は助けましょう。その代わり、あ

なたは名前を失い、星もすべて失います」
どこからともなく聞こえる声は、妖精の女王のものだった。
「それから、人間を危険な目に会わせた事、そして、花妖精に悪事を働かせた事、2人への罰です。これからは2人で協力して星を5つ集めなさい」
縛られたロープから自力で抜け出すと、レオンはルーチェに近づいて無意識に肩を抱く。
声の主を探して周りを見まわしていた。だが女王の姿は人間の目には映らない。
「花妖精、あなたは彼に良き行いを5回させないといけません、いいですね？」
「はい、ありがとうございます女王様！」
「レオン、あなたはこの妖精を人間にするまで、契約は切れません」
「マジかよ？　いや、はい解りました……」
そして、現れた時と同じように光が現れて、女王は消えた。
気付くとそこはレオンの部屋だった。
彼の横では小さい妖精が感極まって涙している。
「良かったですわ、レオンが死ななくて！」
そのままレオンの胸に飛び込むとわんわんと泣きはじめた。

――一度人間になった妖精は、厄介ですよ――

女王は消える前、レオンにそう耳打ちをした。
「お前、俺に惚れたか？　俺の事好きか？」
妖精は少し考える。
「好きですわ！　一瞬人間になれましたけど、色々な気持ちがあるんですのね！　あたくし、人間になった時、レオンの事をとても愛おしく思いましたの。自分の命よりも大切に思いましたの。あたくし、この気持ちを愛とか恋とかいうのだって知ってますわよ。すごいでしょう？　これでいつでも人間になれますわ」

なんだそれ、と呆れ顔のレオンはそれでも嬉しそうに小さな妖精を見つめていた。
妖精が人間の心を持つと、一体どうなるのか、それはレオンも、本人さえも知らない。
「じゃあ、人間になったらお前に家を建ててやる。ついでに一緒に暮らしてやってもいいぞ」
「まあ、ほんとですの？　ならば早く星を５つ集めましょう！　あたくし、星を５つ集めるまでに百年ほどかかりましたの。でも２人ならばきっともう少し早く集まりますわね」
「ひ、ひゃく……？　そんなに時間かけられるかっ！」
こうして黒髪の【元】悪党と小さな花妖精の善い行いをする旅が始まった。
――数年後、片田舎の森の中に家を建てた、風変わりな夫婦がいたとかいなかったとか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7468x/

花妖精、恋を知る？

2011年10月24日03時17分発行